

運命の赤い瞳 Special Edition Ⅲ

目覚めの刻^{とき}

CONTENTS

PROLOGUE.....	3
二色の少女.....	35
SENSE OF DISTANCE.....	103
翳 ^{かざ} す剣 ^{つるぎ} を阻 ^{はば} む城 ^{しろ}	129
覚醒 ^{はげ} の羽撃 ^む き.....	220
EPILOGUE 差し伸ばされる光.....	241

登場人物紹介

東風谷早苗

風祝を営む 17 歳の少女。半人半神の現人神であり、神の力を引き出して様々な『奇跡』を操ることができる。シンを元の世界に戻そうと奮闘するが……

シン・アスカ

‘デスティニー、を駆るザフト軍の少年兵士。機体の修理のため、にとりの作業場で日々を過ごしている。遺伝子調整を施されたコーディネイターであり、S.E.E.D.の因子を持つ。

河城にとり

河童のエンジニア。仲間との河童とともに‘デスティニー、‘インパルス、を修復するほどの技術力を持つ童顔の少女。

博麗霊夢

博麗神社の巫女を務める少女。18 歳。妖怪退治を営み、幻想郷内で起きた様々な異変を解決してきた。早苗とはライバル関係。

霧雨魔理沙

霊夢、早苗の友人である 18 歳の少女。魔法使いであり、人間でありながら多彩な魔法を使いこなす。

レイ (コンタクター)

過去の記憶を失くした金髪の少年。どこか儂げで、高貴な印象をもたらししている。身につけている宮廷衣装は青娥の趣味。

霍青娥

己の欲に忠実な仙人の女性。常に人前で妖しい笑みを浮かべている。自らの求める『力』の一つとしてレイに期待を寄せる。

魂魄妖夢

半人半霊の一族の末裔である少女。長刀‘楼観剣、と短刀‘白楼剣、の二振りを扱う剣士であり、白玉楼の庭師。

比那名居天子

天界の一角に存在する‘神樹の園、でレイと青娥が出会った天人。万物を斬り裂くことができる宝剣‘緋想の剣、の持ち主。

PROLOGUE

深^{こき}縹^{はなだ}色に染まった天に、星々と言う名の光の粉が散りばめられている。

その夜空に加えられる一筋の白銀の影。影は丸い頭部の中にある赤い単眼を鋭く輝かせて、暗闇に染まった世界を捉え続けていた。

そして、その瞳を通して世界を眺める少年。

鉄の子宮とも例えられるモビルスーツのコックピットの中で、レイは白銀のモビルスーツ、プロヴィデンスザク・ファントム^グを操っていた。

宮廷衣装姿の彼は、自らを照らす三面鏡のように設置された液晶モニターを無言でにらんだ。モニターの光景はこの閉ざされた世界の外側だ。そのような景色をともに眺める隣に座っていた女性が口を開いた。

「すっかり^グザク^グを使いこなしているようですね、レイ」

レイの隣で腰掛けていた女性、霍青娥が嬉しそうに頷く。彼女がレイの前に身を乗り出すことで、眩しい白い肌と、僅かに透けている薄い布の浅葱^{あさぎ}色のワンピースが目に入った。レイはそれに対し左腕で払う。

「邪魔だ。大人しくしている」

ピシヤリと言いつけると、青娥は口をとがらせてレイを見つめた。

今は機体を操縦しているのだ。視界を塞がれる事はあつてはならない。

「手敵しいですわね。命の恩人に対して」

「恩人だからこそ、だ。何か見落としたせいで墜落して、俺と一緒に地獄にでも行く気か？」

「それはゴメンですわね。不老不死の身とは言えど、墜落してしまつたら死神の面前に飛び込む事になりますわ。まだ天国にも地獄にも行きたくありませんの。そしてこれからも」

「……出なきやお前は仙人になど、なりはしないだろうしな」

レイが握る操縦桿はもはや己の体の一部同然だった。

記憶にない知識、体が知っている感覚、その通りに淀み無く手先が動く。

しかし、人間の手で動かす以上、不注意による事故は大敵だ。

青娥に対してそれを咎めると、彼女は小さく肩をすくめて舌を出していた。まともに謝る気はないらしい。

「お前がいなければ乗り心地はもっと上だったかもな」

「まあ、トゲっぽい事を言うのですね。コレでも私、生まれの里では美人ともてはやされたのですけれど。密室に美女と二人きり：殿方はこういう事態に憧れるというのを里で聞きましたよ」

「冗談は寄せ。不気味なお前と一緒に肝が冷える」

「ひどいですわね。ミステリアスと言ってくださいな」

感情を載せず、淡々とレイは返した。

そして青娥は飄々と流した。

青娥は実際、兼目麗しく美しい女だった。至近距離で目にすれば尚更だ。

密着してくる隣の彼女から漂う甘い香りが鼻を打ってくる。ザクザクのコックピットにはシートベルトがあるものの、それは操縦席に座る者のためのもの。

本来他者の同乗を想定していないつくりである以上、青娥の体を支えるものがない。

だから彼女はレイに捕まっていた。

青娥から漂う香りは、曰く愛用の香水らしい。気を抜けば虜になってしまいそうな彼女の存在はまるで麻薬だ。

その機能美からかけ離れた豪華なワンピースは、狭いこの密閉空間においては、操縦の妨げ以外の何物でもなかった。

彼女の纏う衣服が、空気抵抗や気圧による振動でレイの手足に絡みついてくるのも気分が悪い。

それに対し、持ち前の精神力で気を保ち続けた。彼女をここまで乗せてきたのは伊達や酔狂からではない。青娥の頼みで今に至る。

——雲の上まで来たが……この先に何があると言うんだ。

巡航体勢を取らせたまま、ザクザクを飛翔させているレイは正面を見つめながら青娥の思惑を

探った。

レイが今目指している目的地は、グ天界^グ。

グ幻想郷^グのはるか上空に広がる、天人たちの楽園とされている場所の名だった。

きっかけは、グザク^グの動作テストをハンガーで行なっていた最中のことだ。

修復されたばかりの、グザク^グを眺めた青娥が突如「グ天界^グに連れて行ってほしい」と言い出したのだ。

「……本当に、この先にあるのか。俺の……体を治すモノとやらが」

初めて向かう未知の場所に対し、レイは青娥に問う。

彼女の頼みを聞き入れるのは、命の恩人であるから、と言った理由だけではない。

レイにとつても、青娥の提案はひどく魅力的だったからだ。

「ええ、間違いありませんわ。天界の地でのみ生る果実……それがあなたの体を苦しめる病から解放してくれる、唯一無二の秘薬となるでしょう」

レイの体は原因不明の病に冒されている。

それを知ったのは、永遠亭^グと言う名の屋敷に連れて行かれたときのことだった。

兔耳のブレザー姿の少女と、長身銀髪の女に体を隔々まで調べられた結果、レイの命は、近い未来に不自然な老化現象を起こし、死に至ると宣告されたのだ。

そのためにこれまで青娥の提案で、体の時間経過が鈍化する、グ冥界^グで過ごしていたのだ。

「白玉楼」の従者として。今は青娥が会得した仙術によって、レイの身体の老化は抑えられている。

しかし、それは一時しのぎであって永遠ではない。

仙術の維持を他者に施すのは限界があるらしく、長くは保たないらしい。

仙術の効き目が切れてしまえば、再びレイは「白玉楼」に閉じ込められることとなる。

冥界から出られなければ、人間として自由に生きることが出来ない。レイは人間としての時間を得るために、青娥と行動していた。

天界特有の雲海の景色に入り、一時間が経過したことを電子時計が示す。

ふと、コックピットの警報用スピーカーから聞こえてくる、電子音の感覚が短くなったことに気付いた。

OSに予め入力していた座標に「ザク」が近づいた事を示しているのだ。

ほぼ同時に、「ザク」の頭部カメラが捉えた景色の中に、不自然な影を見つける。そこへレイはズーム操作を行なった。

「……なんだ、あれは……!?!」

「ふふっ、貴方には特別不思議な場所に見えるかもしれませんがねえ」

モニターに映った奇妙な景色を見てレイは絶句し、青娥は面白げに呟いた。

月明かりに晒された「天界」の雲は、地上から目にするのできる通常の雲と見た目の上

では何ら変わりない。

その中で目的地となる場所に浮かぶ雲は、明らかに他の雲と様子が違っていった。

雲の上には一本の巨木が伸び、その根本には無数の草花が咲き誇る草原が、絨毯のように広がっていたのだ。

草原にある花々は虹色の光を宿している。

廣大に続く雲海の一点に、敷き詰められた花園は、酷く現実離れしていて、幻想的だ。

——いや、今更だな。死後の世界に行ける時点で何もかもがでたらめなんだ、*幻想郷*は。レイは己の認識を改める。

この *幻想郷* の常識は、自分のいた世界では非常識なのだ。*幻想郷* には自分が知らない世界が沢山あることを改めて知る。

「アレが目当てです。寄せてくださいいな」

「本気で言っているのか……？ 雲の上なんだぞ。*ザク* を乗せて沈まないだろうな。モビルスーツの重量は——」

「どれほどのものでも関係ありません。天界の雲は地上の雲とは別物。霊子が凝固し、確たる存在を持った第二の大地です。人の作りし物の重さなど、一切受け付けません。それともしや？ レイが降りるのを怖いって言うのでしたら、手ぐらいいは繋いであげてもいいですわよ？」

「……バカにするな。確認したかっただけだ」

彼女曰く、天界の雲は、幻想郷の大気に漂う不可視のエネルギー……霊子の影響により、人妖が足を踏みしめることのできる、『空飛ぶ浮島』らしい。

その言葉が嘘でないことを祈る。

青娥の指示で、ザクを草原の上に移動させ、着陸態勢を取らせた。ザクの背中に背負うように取り付けられた円盤状のユニット、ドラグーン・プラットフォーム内に備えられたメインスラスターと、ボディ本体のサブスラスターを的確に操作した後。空中で直立姿勢となったザクの足が草原を踏みしめて雲の上に立った。

機体を跪かせた後でコックピットのハッチを開ける。

青娥がすぐさま霊力飛翔で先に外へ出た後、レイはハッチの内部に収納されていたラダーを垂らし、昇降用ボタンを押して体を地面に降ろした。

草原の上に足を置き、落ちないかどうかを確認した後で安堵する。

そして、目の前の景色に圧倒された。

「綺麗だ……」

モニターからでもこの浮島の花園は美しいと感じたが、いざ降り立つとその感動はより極まる。

ブーツの足先を覆うほどに咲き誇る花々。

そよ風に揺れる色は揺蕩うように絶えず風に舞い、花びらを散らしている。

夜空の色ばかりが占めている景色の中で、光り輝いているこの大地に対し、レイは砂漠のオアシスを連想した。

時間が許せるなら、ずっとここで仰向けになって空を眺めても良いかもしれない、とさえ思える。

なぜこの雲だけ他の景色と違うのか。

レイはそう考えたが口にできなかった。

青娥ならばその理由を知っているかもしれないが、今の目的とは関係ない。青娥が見つけたと言う、病気を治せる代物さえ手に入ればそれで良いのだ。

「見とれるのは構いませんが、呆けない。こっちに來なさいレイ」

感傷にふける中、彼女の声で我に返る。青娥は花園の中心に生えている巨木の幹に触れたままレイに手招きをしていた。そちらへと歩む。

——この木が、青娥の求めた物？ 俺の体を治せるものだというのか……

木を眺めながらレイは訝しんだ。彼女は木の幹をさするように指を這わせながら陶醉するように呟いた。心なしか、木に触れている時の青娥の顔が艶なまめかしく見えた。

「そう……これが私が見つけた天然の至宝……この天界で一番の靈力を秘めた木、神樹ですわ」

「シンジュ？」

「ええ。神の樹と書いて神樹。この天界が生まれたばかりの頃、神々の一柱がこの地に桃の苗

を植えたという伝説があります。その苗が育ったのが神樹なのです。この神樹から生る桃が、貴方の命を引き伸ばす」

その言葉の示す意味をレイは掴みあぐねていた。

霊力が、幻想郷において超常的な力の源であることを示すのはとうの前に理解していた。

霊力は人の意思という霊的概念を、物理的な現象として発露させる。

青娥や妖夢たちが翼も持たないというのに空を飛ぶ事ができるのも、弾幕と言う名のエネルギー体を操れているのも、すべては霊力があるからと聞く。

その霊力が詰まっている桃の果実がなぜ、自分の体を治す材料になり得るのか？

「以前、私は、白玉楼で貴方の体には欠陥があると言いましたわよね。それは貴方が人以下の体であるから。人が通常持っているはずの霊力をその身に宿していないからです」

「なんだと？」

何度めかの疑問がレイの口から零れた。

レイの驚きは、青娥の言葉の意味が分からない、と受け取られたのか「そのままの意味ですわ」と青娥は付け加えた。

「太古より仙人として生きながらえ、あらゆる文献に目を通した私だからこそ貴方の身の丈に合わない老化現象の正体がわかりました。……人や妖怪の身を構成する生命の力。それが霊力。レイ、貴方の身に宿した霊力は今にも枯れ果てようとしているのです」

次々と並べられるレイ自身が考えもしなかった結論に、返すべき言葉が見つからない。

レイは頭のなかで疑問符を浮かべているばかりで、青娥の続く言葉を耳にした。

「たとえ『幻想郷』の人間でなくても、弾幕と飛翔ができなくとも、霊力は人妖ひとまが持つべき命の力。霊力はどの世界で、どんな生まれ方をしようとも、命あるものに宿っているのです」

「……だったらなぜ、俺の体に霊力がないんだ？」

不平等な身分であることを知らされて、理由を問わない道理はなかった。

なぜ自分は短命なのか。

それを記憶の失う前の自分は知っていたのか。

知っていたとしてどんな生き方をしてきたのか。

青娥の言葉に興味が次々と湧き上がる。

「『幻想郷』には『外』の世界……博麗大結界の向こう側にもう一つの世界があることは言いましたわよね」

「『幻想郷』の住民が呼ぶ『外の世界』……人間のみが大地を踏み、神や妖怪の類が生きていけなくなったという世界か」

「その通り。『外の世界』の人間は、自ら生み出した技術と科学のみを信じ、不確かなもの、人にとって利益にならないもの、そして自分たちにとって脅威となるものを世界から排除できるように、世界を自分たち好みに創り変えていった。その結果、私たちではない妖怪は、幻

想の身分となつてこの『幻想郷』にしか棲みかを見いだせなくなった」

「人ならざるものを排除した、世界……」

「確かな実入りを約束する科学だけを信じ、アテにならないと断じて幻想を排除した世界では、科学の力だけでは観測できないものがある」

「科学の力で、観測できないもの……」

「そう。その一つが霊力なのです。……そして、私は調べました。生まれながらにして霊力の喪失を引き起こす、禁忌の所業を。許されざる命の扱い方を」

青娥は口調こそ変わらないが、眼差しは真剣だった。その蒼い瞳にレイは合わせる。

「レイ。貴方は——元の世界における誰かの贖作がんぎくといえる存在。『外の世界』で言う、クローンなのでしょ」

「クローン？」

「ええ。貴方は言わば、他人の複製品。不完全な技術であるクローニングは、人為的に人の命が宿る肉体を生み出せても、自然のままに授かる霊力を宿すことは出来ない。……レイ。貴方は本来生まれることが許されない『不完全な命』なのです」

胸を槍で貫かれたかのような衝撃がレイを襲った。

青娥の言葉を受け入れられない。

受け入れられるはずもない。

不完全な命？

生まれることが許されない命？

自分は、普通の人間ではない……？

次々と突きつけられた事実があまりにも現実離れしていた。

記憶がなく、現界で生きられない時点で自分が普通ではないことは思い知らされている。

だが自分が『不完全な命』と断じられて、平気でいられる訳がない。

「なぜ、それが分かった……？」

「貴方を拾った後、早々に里の医者に見せたではありませんか。あの兎耳の妖怪と銀の髪医者覚えていないのですか？ あの二人から、貴方の体のことについては聞かせていただきました」

青娥が挙げた医者は、里で往診を恒常的に行なっている妖怪たちだ。玉兔の妖怪、鈴仙・優曇華院・イナバと、地上に降りた月人、八意永琳によって血液検査を受けた覚えがある。

「『永遠亭』の医者の腕は全幅の信頼に値しますわ。そして、驚いてもおりました。貴方に施されたクローニング技術は、外の世界では実用化されていないものらしいのですから。やはりインバルスといい、ザクといい、貴方の生まれ育った世界は、私が知る科学の数段上を行くようですね」

「……………」

「怖くなりましたか？ 己の身体の事実に。……無理もないとは思いますが」

青娥はさらにレイの体から分かった事実について続けた。

十代にしては不自然なほどのテロメアの短さ。血液に残っていた、人間が通常持たない成分の反応など。今こうしてレイが生きているのは不思議なくらいだと、医者は言っていたようだ。「^レ外の世界^グでは、テロメアの短さが寿命の短さにつながるといふ一般論が通っているらしいですが、実際は今私が説明した通り……貴方の体は、とつくに限界を迎えてもおかしくない。今生きている事自体が幸運と言つて良いでしょう。それを可能にしているのは、おそらく貴方が記憶のあるうちに摂取した劇薬の効果によるもの。それさえも消えてしまえば……貴方は間もなく死ぬでしょうね」

「……理解はした。納得もできた」

レイはうるたえる己の心を押さえつけたまま、震える口で問いかける。

「なら俺はどうすればいい？ 俺に死を運命づける、このいい加減な体をどうすればいいんだ？」

胸の奥に宿る心臓の鼓動に触れつつ、レイは訴えた。

自分はこうして生きている。他の人妖ひとまと同じように、生きているのだ。

なのに、自らに与えられたものは不平等な命。

「まさか、ただ事実を突きつけて俺の顔が恐怖に染まるのを見たいだけではないのだろうな。」

妖夢を、白玉楼に置いて、こんな辺境の場所にまで連れ出して置いて。貴様の言いなりとなり、俺は、幻想郷に入り込んだ癌……モビルスーツの一機を討った。その見返りを、お前は俺にくれるつもりなのだろう？」

そんな道理を覆すために、ザクを手にしたのだ。

自分以外の誰かを殺してみせたのだ。

その成果が自らの未来につながると信じて。

「もちろん、そのつもりですわ。天功を破った貴方の命を、完全なものに変えるのが、この神樹」
青娥は軽く跳躍し、神樹に生なつていた桃の一つを掴み取る。そして降り立った後でレイに差し出してきた。

「この桃は……神樹の桃は、霊力の喪失そのものを補えるもの。これを口にすれば、貴方の命を蝕む病は、消え去るでしょう」

「それを食べばいいんだな」

青娥の言葉を聞いて即座に手を伸ばそうとする。

しかし、青娥はレイの右手から桃を遠ざけた。

「ですが、今の貴方にコレは危険です」

「なんだと？」

両肩をすくめて、青娥は平然と言い捨てた。

「記憶を失くした貴方でも、風船に過剰な空気を入れればどうなるかぐらいはわかりますよね？ 天人でもなく、修行を積んだ仙人でもない人間の貴方がこれを口にすれば、過剰な霊力を受け止めきれず、死に至りますわよ」

青娥曰く、[〃]外の世界[〃]では桃は、性の象徴、豊穡の象徴とされ、食す者の邪気を払い、不老長寿をもたらす果実とされているようだ。

そして神樹の桃は、[〃]外の世界[〃]で幻想とされた不老長寿の源となる霊力を秘めている。

しかし、その実態が青娥の言うものならば、レイの身にこの桃はあまりにも強すぎる毒だ。

「それでも貴方は、この桃を『人間の身』で、食しますか？」

「……そんな、ことは」

思わず感情的な言葉が漏れ出た。目と鼻の先にある桃を前にして震えたレイは、歯を食いしばる。

苦々しい口の中の感触が、極めて不快だった。せり上がってくる激情から青娥の手にする桃を握りつぶしてやりたいと、そう思った。

どうすれば、いいんだ。

レイは圧倒的な悔しさに打ち震えていた。

「だからといって、貴方をやすやすと見捨てる私でもありません」

青娥はそう言い、急にレイに迫って耳元に顔を寄せてきた。何の真似だと問う前に、彼女の

口からある打開策が発される。

——それしか、ないのか……？

聞こえてきた言葉を受けて、レイは妖しく微笑む青娥の底知れない瞳を覗く。

彼女の抱えているはずの真意を読むことは、レイにはできなかった。

『仙人になれば良いのですよ、私のもとで』

——コレで貴方は、人であることを捨てるしかないのです。

この地へと導き、絶望を顔に宿している少年にそう囁いた後で。青娥は両手を頬に当てながら絶頂にも等しい快感に身悶えていた。

信じて求めていたものを前にして、すべての感情が絶望に変わる時。

その瞬間に与えた自らの言葉は、レイにとつて魅力的以外の何物でもないはずだった。

レイを見つけたのは、幻想郷^レの外れの僻地^{へきち}。

青娥が修業の場として赴^{おもむ}いている、山々の片隅に存在する谷底だった。

見慣れぬ白い装束を纏い、血まみれの彼を一目見たときから青娥は彼に取り憑かれていた。

かつて愛した夫との間にできた子の面影を宿した少年。

仙人となった自分よりも先に朽ちてしまった息子と同じ無垢な瞳を前にして、青娥は己の物

にせずにはいられなかった。

衣服を与え、冥界に住まわせて。

その生命を己と同じ長さにするためにこの幻想郷^{ルナ}中を駆け巡った。

そして己が口にした桃と同じ実を、ついにレイは前にしている。このことに悦^{よろこ}ばれずいられるものだろうか。

今の青娥はレイを心底抱きしめたくてたまらなかった。そう、今のままでは彼は人間以下の人間でしかない。

ならば、その身を仙人と同じに『作り変える』しかない。

俗世を捨てた仙人は、己と同じ域に他者が立つことを嫌う。

しかし邪仙などと人々から囃^{はや}された霍青娥は違った。

己の欲するものは容赦なく手に入れる。どんな手を使ってもだ。

青娥が欲しかったのは『永遠の息子』だった。

修行で己に従うキョンシーを手に入れたとしても、ただ従うだけの人形など、相手にしてもなんの面白みもない。

己に付き添い、されど自分の意思を持つ存在。

それでいて自分にとって都合の良い者を、青娥は自身の永い生ですり減った精神の慰めとし

て欲しかったのだ。

——さあ、貴方の答えを聞かせて！ レイ！！

「俺は……」

さあ！ さあ！ さあ！

レイの閉じられた唇をこじ開けたい思いに駆られる。

そして開かれたら耳元で囁いてあげるのだ。

「勿論」——と。

己に等しく、己の都合に合わせる命。

それが青娥に取り付いた大欲の正体の一つだった。そして今か今かとレイを見つめ続けていたその時。

「……あら、無粋ですわね」

青娥は背後から漂う殺気を感じ取り、右手を後ろ髪の方へ滑らせた。

「何？」

「邪魔な色がこの場に加えられたということですよ」

かんざし代わりの鑿のみを抜き、素早く青娥は後ろへ体を向けた。

衝撃。殺気の彼方から飛来したのは緋色の刃だった。回転しながら迫るそれに対し、鑿のみを押して弾き飛ばす。容易たやすく弾き飛ばした刃は、空中で弧を描きつつ、主の手に収まる。

「見ておきなさい、レイ。地べたを見下す天人様のご登場ですわ」
緋色の刃が剣と判^{わか}ったのはその瞬間だった。

陽炎のように揺らめきつつも、確かな実体を持つ緋色の刀身を携える、空色の髪の少女がいた。

腰まで届く長い髪を風に揺らめかせた少女は、黒帽子の奥から赤い瞳をこちらへと向けていた。その顔は怒りに染まっており、手に収めた剣をまっすぐにこちらへと突きつけている。

明らかな敵意を彼女は露わにしていた。

「アレが、天人？」

レイがそう疑問に思うのは当然だった。

雲の上に棲む天人と聞くからには、もっと威厳に満ち溢れていたイメージを想像していたのだろう。だというのに、目の前の少女は、レイとほとんど変わらない歳の女だ。纏う衣服も古めかしいものではなく、虹色の飾りやフリルが付いた、幻想郷^{マニマニ}においては若者らしい格好である。

「アンタ……何者？ 総てを絶つ^す緋想の剣^{マニマニ}の刃を受け止めるなんて……！」

少女は認めたくない現実に驚愕していた。

そして青娥は少女よりも、少女が持つ得物に目を惹かれる。

——見つけましたわ、第二の目的！

見まごうはずもない緋色の刀身を持つ剣。

青娥はそれが、緋想の剣であることを看破した。

この天界に来たのは、あの剣を手に入れるためでもあった。

剣に選ばれし天人にしか扱えないとされているその宝剣は、天界に伝わる至上の『力』の一端。

「お初にお目にかかりますわ。天人くずれの生娘……比那名居天子さん」

この地へと足を運べば、必ず彼女に会えると確信していた。

その手に在る、緋想の剣はこの世のどんな物質に対しても、斬り裂くことができるとされる、万能の剣。

青娥はこの世界に来てから己が目をつけた人妖ひとまじに関して、全て前もって頭に叩き込んでいた。いずれこの世の『力』の全てを手に入れる欲を持つものだから。

「私の名を……!? アンタたち、一体何なのよ! ……お父様と喧嘩したばかりで、機嫌悪いつてのにッ! その花園は、私のお気に入りの場所! 誰であろうと、私以外の誰かが踏み荒らすなんて、許せないわッ!!」

「貴方の都合なんて知りませんわ」

「な——ッ! アンタ……!」

青娥は急に敵意を向けてきた比那名居天子に対し、手始めに挑発を投げつけた。

自分とレイ、二人きりの時間の邪魔をした罰のつもりだった。

そして、自分より若い娘がムキになってる姿は面白くて仕方がない。

「なんだあのうるさい女は……」

「あの娘はこの天界で有名な不良天人、比那名居天子ですわ。親の目を盗んで借用したあの剣……、緋想の剣でかつて、幻想郷に異変をもたらした小娘です。……本人にお会いするのはこれが初めてですがね」

「ふん！ この場に出す邪な仙人の耳にも届くなんて、私も有名になったものね……！」
レイに天子について紹介すると、彼女は胸元に手のひらを強く当てつつ、自分たちへ向かって宣言した。

「そうよ、私は比那名居天子。天界に住まう事を許された天人にして、天界を司る名居一族の娘！ 人は私を、非想非非想天の娘と呼ぶわッ!!」

非想非非想天、すなわち有頂天。

天上界における最高の天を意味する無色界の頂を示す言の葉。

天子は自らの位を突きつけて豪語する。

しかしそんな自慢は青娥にとって無意味なものでしかなかった。

小生意気な娘の虚勢など、何の面白みもない。

「鼓膜に刺さりますわ、貴方の甲高い遠吠えは。羨もできていない犬のように騒ぎ立てるほど、貴方の人格は愚かかしら。それでは下手な人間よりも格が劣りますわよ」

「言いたい放題、好き勝手……！ その口、噤^{つぶ}ませてあげるわ！ この何者をも打ち倒す、
緋想の剣^〴で痛い目見せてあげるッ！ 勝負なさい、邪仙！」

「『決闘』のお誘いですか。実に面白い冗談。浅はかに口にしたその言葉が間違いであることを、
負けて這いつくばって知るといいですわ」

青娥の機嫌は最悪だった。

レイの絶望に陥った顔を、せっかく楽しませてもらっていたと言うのに邪魔された。そのツ
ケを天子には払ってもらわないと。

青娥は全身から静かに靈力を解放した。

自らが身に着けているワンピースと同じ、浅葱色^{あさぎ}の靈力の光が全身から沸き立つ。少しだけ
本気で相手をするつもりだった。

そこで青娥はあることに気づき、笑顔を取り繕ってレイに振り向いた。

「そう言えばレイ、貴方はこの世界の対話の一つ……『決闘』を見るのは初めてですわね。貴
方はここで見ていなさいな。この世界における相互理解の一端、レイに心ゆくまでお見せしま
しょう」

レイの顔は心ここにあらずと言った様子だった。しかし、今は天子をどうにかしなければ。
青娥は無造作に鑿^{のみ}を持つ右手を真横に突き出した。

——さあ、おいでなさい、私の使いよ！

その鑿のの先端を中心に広げられる、真黒の孔。

鑿のを介した異空間の接続——仙界へとつながる時空回廊を青娥は召喚したのだ。

「緋想の剣がに耐えられるほど硬い他に、大道芸も得意ってワケ!? そのトンデモかんざしは……ッ！」

「貴方の剣と同じですよ。この鑿のも神が造りし道具なのです。故にその剣と同格。この程度のハチャメチャ、私の鑿のなら造作ありません」

「冗談！ 私の剣に並ぶものなんか、この幻想郷に……有りはしないわッ!!」
天子は青娥にそう言い捨てつつ、緋想の剣を縦に一閃させた。

その刃の先端から高濃度の靈力の光が射出される。緋色の威光による斬撃波が、空を引き裂きながら青娥に迫った。

かなりの大きさだ。緋想の剣による靈力も決して脅威にならないわけがない。あの光の刃がこちらにまで届けば、青娥自身もレイも怪我は免れないだろう。

「青娥！」

「心配いりませんわ」

焦りから来たのかレイが名を呼んでくれたことに愉悦を得つつも、青娥は平然を装う。孔は開いた——！

時空回廊に右手を滑らせ、目当てのものを掴み上げる。そして——青娥の立つ天界へと

引っ張り上げた。

斬撃波が青娥に迫り、至近距離で爆発した。

天子の放った靈力の本流が大地に衝突し、土煙が巻き起こる。

「……しまった、私の園が……！ やりすぎたッ！」

天上からそのような声が聞こえる。軽く上ずった声に対し、青娥は口元を僅かに曲げた後で足に力を込めた。青娥に痛みは届かなかった。

引っ張り出したモノが、斬撃を受け止めたから。

そして——靈力飛翔。土煙の中で足に靈力を萃めて、青娥は解き放った。

「な——ッ！」

「躲せないでしよう、この距離では」

天子の驚く顔が目の前にあった。青娥は満面の笑みを意趣返しに送った。

土煙を吹き飛ばしつつ跳躍して天子に接敵した青娥は、相手の胸元に手を伸ばし、力を込めた。

至近距離からの不可避の弾幕だ。蒼の光が、突き出した青娥の掌に集う。受ければ天人と言えども無傷ではすまない。

「私を守って、要石ッ！」

しかし、天子の反応は思ったよりも早かった。相手がそう叫ぶと、真下から何かが迫ってくる。

ることを青娥は知る。咄嗟に後方へと跳躍し、悪寒の正体を目にした。

「どう、これが私の要石。剣だけが私の力だと思つたら、大間違いよッ！」

飛来してきた物体——要石は、天人が扱ふことのできる特殊な岩だ。そして天子は要石を、『決闘』における武器としても使っていた。

しかし、青娥はそれすらも知り尽くしていた。

天子の戦う手立てすべてが、自分の持つ力に何一つ能わぬことも。

「私の前に壁は無いも同然です」

青娥は空中から更に翔び、岩へと突撃する。その速さに躊躇いはない。

「正気!？」

天子からすれば自分から岩に激突しようとしている、酔狂な女にしか見えないだろう。

しかし、そうではない。青娥は手にした鑿のみで硬い要石の岩肌を貫いた後、その奥にいる比那名居天子の胸元めがけて鑿のみを突き刺そうとした。

交錯。咄嗟に反応した天子の、緋想の剣と青娥の鑿のみが斬り結ばれ、互いの霊力が火花のように弾けた。

「アンタ、要石を突き抜けるなんて……！　なんてやつなの!?　あの男を見捨ててまで！」

「見捨ててなどおりませんわ。あいにく私には便利な『駒』がいくらでもおりますの。平気で肉壁になることも厭わぬ忠実な死体がね。ほら、御覧なさい」

天子に問われ、青娥は大地へと視線を促す。レイの隣には青娥が誇る忠実なしもべを向かわせている。

土煙が雲上で吹く風にかき消されると、赤色の中華風の服を着た少女が予定通りレイの目の前に立っていることに、青娥は口元を歪めた。

「おー……いきなり呼び出されて身代わり役とはひどいぞ青娥」

「貴方だからできる役回りを託したのですよ。私の可愛い死体……宮古芳香」

彼女こそ、青娥が呼び寄せた『駒』だった。

宮古芳香の名を持つキョンシーの少女は、棒のようにピンと張った両腕を正面に伸ばしつつ、靈力障壁を展開して斬撃からレイの体を守っていた。

「お前は……」

「……青娥にお前を守れと命じられた。考える頭のない私はそれに従うのだ」

レイの言葉に振り返ることもなく芳香は返した。

その様子を遠目に眺めて満足した青娥は、緋想の剣を手にする天子に左手を伸ばし、掴んだ。

「隙あり」

仙術で鍛え上げた握力を發揮して、天子の右手を碎かない程度に握りしめあげる。その手から緋色の刀身がこぼれ落ちた。

「いただき……どっ、こいしょッ！」

「うあッ！」

青娥は、レイ緋想の剣^ヲを奪い取り、用済みとなった天子をレイたちのいる草原へ投げ飛ばした。天子がレイの目の前に墜ちる様子を見届けた後で、奪い取った、レイ緋想の剣^ヲを舐めるように見通した。

「ああ……！　これがあの、レイ緋想の剣^ヲなのですわッ！　天人の宝にして、どんなものも斬り裂けるといふ！　幸せですわ……！」

天子の手から離れた、レイ緋想の剣^ヲは輝きを失っていた。本来の美しい姿が隠れてしまうのは不本意ではあるものの、念願の『力』の蒐集をまた一つ叶えたことに、青娥は少女のように喜んだ。

そんな青娥に対し、レイは倒れた天子に駆け寄った後で怒鳴りつけてきた。

「青娥、やりすぎだ……!!」

頭から地面に投げ飛ばされた天子は苦痛を浮かべながら草原に転がっていた。レイはその上半身を抱き起こしている。どうやら彼女の心配をしているようだった。

しかし、この程度で傷つくような体を天人は持ち合わせていない。

天子は血も流しておらず、目立った傷もなかった。それが桃の力から来ることを青娥はよく理解していた。

尸解仙しかいせんである青娥もかつて天界の桃を口にした経験を持つ。強靱な肉体を得るためには、人と同じように天界の桃を得る必要があるのでから。

「神樹の桃も一つ頂きましたし、私のコレクションとなる剣も手に入れた。もうこれ以上は天界にいても無駄ですわね。あーあ、疲れちゃったわ」

青娥は手にした、緋想の剣[〃]を、再び開いた時空回廊の中へと放り込む。その先は青娥が所有する倉庫だった。天子の手が届かない所へしまいこんだことに満足していると、当の天子が顔を歪めながら意識を取り戻していたこと気付く。彼女はレイに抱えられながら痛む頭を抑えていた。

「いたた……なんて馬鹿力よ……！ って、ああ！ 剣が！ 私の剣がない！」

「頂いちゃいましたわ。貴方の手には余る物。なれば持つていても仕方がない。あの剣は今後私のコレクションとして大切にしまっておきますね」

「冗談じゃないわよ！ アレはお父様からの借り物！ 俗人の邪仙如きに奪われて良いものなんかじゃないわッ！ ……アンタもいつまで私に触つてんの!? 気安いのよッ!!」

天子は青娥へ対する怒りの弾みで、介抱したレイへ拳を突き出した。女の腕だが天人の力は人間の何倍をも誇る。まともに受ければ大怪我は確実だった。

しかし、その細い腕はレイに届かない。その拳を受けた鈍い音がレイの眼前から響き渡る。天子の気づかない間に近づいた芳香の体が、天子の右手を受け止めていた。肩に拳を受けた

天子の手首を掴んで不思議そうに芳香は呟く。

「うおー。なかなかいいパンチだけど。天人でもこんなものなのか。固い私の死んだ体には無意味だな」

「……その子を静かにさせなさい。でもやりすぎて殺してはダメよ、芳香。万が一他の天人が剣を扱えないのでは、緋想の剣の輝きが二度と見られなくなりますからね。選ばれし者にしか剣は扱えないらしいのですから」

宮古芳香は生きた死体、キョンシーだ。死体に痛覚はない。文字通りの肉壁となれる彼女は、いかなる脅威にも臆することはない。それでいて青娥にどこまでも忠実なのだから、コレほどまでに便利な道具はそうそう無いと青娥は思っていた。

唯一芳香に足りないのは知性だった。加減を言い渡さないと、どんな相手でも殺すまで手を加えかねない。

天子には、自分の言いなりになってもらわなければ困るのだから。

「わかったぞー。いちげき、ひっさつ」

「アンタたち何を勝手に……！ ごふっ……！」

「一丁、上がり」

レイが青娥らの会話にあっけにとられる間に、芳香の重い拳が天子の腹を殴りつけた。物言わぬ姿となった天子に対し、レイが声をかけるものの返事はない。

「芳香……と言ったな、お前。やりすぎなんじゃないのか」

「天人はコレくらいじゃ死なない。刀で斬りつけても弾幕で撃たれても傷つかない体に、拳一つ。優しいくらいだ……おい金髪、ホツとしているのか？」

青娥はそこで不思議がった。レイの今まで見せることのなかった様子が奇妙に見えたからだ。他者の生死に対し、気にかけるレイは、酷く新鮮に見えた。ザクで容赦なく命のやり取りを行えるというのに、生身の誰かが死ぬことには耐えられないとでも言うのだろうか？

「当たり前だろう。今のは急所を狙っていた。この女が天人でなければ……」

そこで青娥は気付く。レイが他者の死を目にすることを恐れていることに。

外界を隔てるモビルスーツに乗っているからこそ、ザクの躊躇いのない動きが実現できることを。映像を介さずに目にする誰かの死に対し、レイは恐れているのだ。

「おかしなやつだ。お前からも血の臭いがするというのに。人を簡単に殺せる臭いだ」

「なんだと……！」

「はいはい二人とも。仲違いはそこまでです。味方同士で争ってどうするんですか」

空中から地面に降り立った青娥がレイと芳香の間に割って入る。

レイは珍しく怒っている様子だった。

よほど自分たちに無関係な天子を一方的に下したことを腹立てているらしい。仙人になる道を告げた時に浮かべていた失意の表情は、すでに消え去っていた。

しかし、先に喧嘩をふっかけてきたのは天子だ。青娥としては降りかかる火の粉を払っただけにはすぎない。

気にしすぎなのだ、レイは——青娥の感覚では、そうとしか思えなかった。

そのあたり、芳香は従順だ。顔色一つ変えること無く——死体なので流れる血すらないのだが——自分の命じたことを実行する。

そして、強い死人を一人持つているのだ。強い『力』を持つ、生きた人間も一人くらい欲しい。だから青娥はレイを欲した。レイのように生意気な者が一人くらいいなければ、あまりにも毎日がつまらない。

それが青娥に芽生えた新たな欲だった。

「……そろそろ帰りますよ、二人とも。私達の廟へ。……ああ、レイは初めて向かうのですよね。私達の道場に。この際ですから招待しましょう。時空回廊を開きますので、ザク」に乗って付いてきなさい」

「なに……？」

鑿のみで開いた時空回廊の奥へと芳香が消えてゆく。青娥も孔の奥に入りつつ、レイに振り向いて言った。

「私達、道教の者が集う地。神靈廟しんれいびやうに」

青娥はそう口にして右手で小さく手招きをする。

レイは何も言わず青娥をにらみつけた後、力なく倒れている天子をコックピットに担ぎ入れて、ザクを起動させていた。彼女を放置するのは気分が悪かったのか。

モビルスーツすら余裕を持って通り抜けられるほどの孔の大きさ。青娥は自分の持つ力の万能さに酔いしれる。

その虚空の奥深くへと、レイのザクを招き入れた。